

鹿屋体育大学学術情報リポジトリ

National Institute of Fitness and Sports in Kanoya Repository

Title	鹿屋体育大学附属図書館の「電子資料化の促進」について
Author(s)	森, 一郎
Citation	大学の図書館, 19(2): 28-30
Issue Date	2000-02
URL	http://repo.lib.nifs-k.ac.jp/handle/123456789/1229



国立大学法人 鹿屋体育大学
National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

.....
特集 資料の電子化

鹿屋体育大学附属図書館の
「電子資料化の促進」について

森 一郎
.....

1. 本題に入る前に

鹿屋体育大学附属図書館では、電子図書館的機能の整備のため、平成9年度に「電子図書館的機能のビジョン策定ワーキンググループ」を設置し、「電子資料化の促進」、「情報利活用教育の推進」、「体育・スポーツ科学に関するデータベースの構築・提供」の3点を重点項目とした。

これを受けて、翌平成10年度には「鹿屋体育大学附属図書館の電子図書館的機能の整備方法・方針等検討ワーキンググループ（教官3名、事務官2名で構成）」を設置し、前年度、重点項目とした中の「電子資料化の促進」については、著作権処理が比較的容易な「学術研究紀要（本学紀要）」、「各センター等報告書」、「貴重資料等」、「授業用テキスト」、「本学で製作された映像資料」をWWWブラウザで参照可能な形式にし、公開することにした。

2. まずは実験

近年、紀要の電子化イコールPDFというような状況になりつつあり、新規刊行分に

についてはPDFを採用するのが一般的な選択であると思うが、鹿屋体育大学においては、紀要に関する事務は庶務課の所掌であり、図書館の都合だけで、すぐにPDFを採用することができない事情がある。

このような状況において、どのような方法で紀要を電子化できるのかを模索するため、実験的に、既刊の紀要に掲載された記事1件について、執筆者からワードプロセッサの形式のファイルをもらい、これを一旦プレーンテキストにし、冊子体の紀要でレイアウトを確認しながら、できる限り冊子体のイメージを残すようにタグを付け、HTMLにし、前掲、平成10年度のワーキンググループに評価してもらった。

この際、記事中の図表についても、執筆者からビットマップイメージをもらい、これを適当な大きさに直すと同時にGIFにし、本文中の、例えば「図1のとおり」のような記述の「図1」に対して、対応する図表が現れるようにタグ付けした。

これは図表が参考文献からの引用である確率が高く、かつ、図表だけで1つの著作物となる可能性が高いことを考慮しての措置であり、仮に著作権者との間で争いが起これば、何らかの責任が及ぶことは避けられないにしても、可能な限り責任を小さなものにするため、参照できる範囲を制限できるようにとの発想である。

さて、ワーキンググループからの著作権問題以外の主な評価として、教官からは、

1. 本文と図表とは同じ画面（ウィンドウ）で見たい。
2. HTMLでは、本文中に複雑な計算式等が現れると再現が困難なのではないか。

事務官（図書館）からは、

1. 執筆者がワードプロセッサ等のファイルを保管していない場合、遡及的に入力するのは負担が大きすぎる。

といったものが出された。

3. 実験とは別に

上記のような実験とは別に、以下のような電子化を同時進行的に行った。

鹿屋体育大学附属図書館は開館して20年

にも満たない図書館であり、「貴重資料」と呼べるようなものはないに等しいが、若干ながら武道の分野に関する和装本がある。このような資料は、通常、どこの図書館でも貸出対象外である上、閲覧するにも一般の資料とは別の手続を要することが多いと思われる。従って、このような資料を、いつでも、どこからでも（端末があれば）参照できるようにすることには一定の意味がある。

さて、これらの資料を電子化する際、

1. 表示されるまでの時間が短いこと。
2. 資料の雰囲気を残すこと。
3. 極端に小さい文字で書かれた部分以外は判読できること。

を条件として考え、「紙に附着した汚れも研究対象である。」などということは考慮しないことにし、1ページずつ（卷子本などは余白などで区切っている。）イメージスキャナで取込し、JPEGで保存・公開した。

取込を1ページずつとしたのは、単にスキャナの大きさの都合で2ページ同時（開いた状態）では取込できなかったためである。また、デジタルカメラを使用するという選択肢もあったが、取込の際の歪みを最小限に抑えるためスキャナを使用した。これらの画像は72dpiのフルカラー（使用したスキャナのデフォルト）で取込したものを70%縮小して使用している。

なお、「画像とは別にテキスト情報を持ってないか。」との声も上がったが、画像を用いない電子化の試みとして、著作権保護期間を過ぎた活字本（五輪之書）を、職員がタイピングして電子化した際の労力から考えて実現は困難であり、見送ることにした。

4. これらをもとに

紀要のHTMLによる電子化に対するワーキンググループの評価と、和装本の画像による電子化とをもとに、紀要も画像で公開する方法を考えるようになった。画像を用いた場合、検索などに対応できないなどの欠点もあるが、文書中に特殊な文字が現れても問題なく表示できるなどの利点もある。また、文書の盗用抑止という点で、多少、長じている。紀要についても、和装本と同じ考え方で画像

を取込したが、解像度等に関しては、いろいろ検討した結果、144dpiの16階調白黒で取込したものを70%縮小して使用することにした。

また、本文に先行して目次をHTMLで作成・公開しつつあったが、本文に画像を用いるのに合わせて目次も画像（144dpiの256色で取込し70%縮小）にし、目次に表示された記事の部分をクリックすると該当の記事が表示されるように改めた。

このように、電子化の方法をHTMLから画像（JPEG）へと方向転換したわけであるが、JPEGは大きさに関する情報を持たないので紙への出力には向かない。今のところ「いつでも、どこからでも参照できる」ということに主眼を置いているが、今後は紙への出力についても検討する必要がある。

これとは別に、現状では紀要の電子化に関して、著作権処理も含めて完全に遡及的に作業を行っている。しかし、紀要の著作権者には学外の研究者も含まれており、遡及的な作業では作業量が大幅に増大する。従って、少なくとも、著作権処理だけでも刊行と並行して行われるように方策を講じる必要がある。

また、著作権に関しては、前述の引用著作物の著作権問題が解決したわけではない。現在、公開している記事の中には特に問題となりそうな部分は確認されていないが、今後、これらの著作権処理をどのように行うのかも検討課題である。

なお、ここに紹介した電子化資料を参照したい方は、下記をご覧ください。

<http://www.lib.nifs-k.ac.jp/e-lib.html>

(もり・いちろう)

鹿屋体育大学附属図書館)